

◆春



一九六一年に日本への帰化が確認されて以来、各地で繁殖の著しい花。地中海沿岸が原産。秋の草刈りの前後に芽生え、越年して、翌春に一気に成長して花を咲かせる。花色は鮮明で賞価値もあるため、咲いている間は抜き去ろうとする人もあまりいない。それに初夏の草刈までにはさつさとタネをつくって枯れ、跡形もなくなるので、誰の邪魔にもならない。そのめヒトとは比較的良好な関係にある。そのうえ、実の構造も秀逸。熟すと頭部に展望台の窓のようにずらりと並んだ開口部ができる。ナガミヒナゲシはこの穴を使い、茎が揺れるたびに、子の材料でお馴染みの芥子の実さながらの、小粒のタネをさらさらと振り撒くのである。々々、各地で陣地を広げているのは、こうした特性のおかげであろう。なお本種は面白いこと、生えている場所の土地の肥えぐあいや、生えている密度によって、花弁の大きさが大きく化する。繁殖のうえで重要な花の大きさだけは変えない植物が多い中では異例の存在だ。ケ科の二年草。

ナガミヒナゲシ



2009年4月20日、神奈川県で撮



2007年6月16日、奈良県で撮影

それより内側を埋め尽くす筒状花の二種類が認められるケースが多い。舌状花は、五枚の花弁を一つに癒合させて発達し、まるで一枚の花弁のような姿を見せるが、多くの場合、果実を稔みらせることがない。筒状花は五枚の花弁を、ごく短くしか発達させず、花筒も短いが、雄しべも雌しべも発達しており、基本的に次世代を担うのはこれら筒状花である。

舌状花と筒状花を作り分ける仕組みとしては、花の左右対称性を制御する遺伝子のはたらきが知られている（塚谷、二〇〇一年『植物のこころ』岩波新書参照）。

***舌状花と筒状花** 写真のように、キク科の花の多くは、多数の小さな花が集まって一つの塊になり、まるで一個の花のように見える姿をとる。こういう形態を頭花という。頭花には、その外周を担当して花弁が長く発達する舌状花と、

ハルジオン（↓26ページ）とヒメジヨオンは名前も似ているし、見かけも似ているので、身近な草花の見分け方入門として、よく例題にも使われる組み合わせだ。名前は一度漢字で書くのと、間違えなくなるだろう。春紫苑と姫女苑である。見た目の区別はハルジオンの項に記した通り。なお写真の個体は正確にはヒメジヨオンの近縁種、ヘラバヒメジヨオン。ヒメジヨオンは頭花に占める筒状花とうじょうか*の比率が舌状花すけじょうか*に比べて低い、ヘラバヒメジヨオンはほぼ同等。キク科。

ヒメジヨオン



2002年3月20日、愛知県で撮影

草全体が小さいうえ、葉も細くて目立たないので、ちょっと気を許していると鉢の上などにも生えてしまう小型の雑草。花付きが良くそのあと微細な種子をたくさん付けるので、いったん生えだすと切りがない。小型なだけに、都会でもちょっとした隙間があれば、誰にも見とがめられることなく育つことができる。写真の場所はたいへん都合の良いことに、アスファルトの隙間であるうえ、窪みにもなっていたため、ヒトにも車にも踏まれることもなく、安全に暮らせる様子だった。完全に自分だけの独占環境を確保したといったところ。ナデシコ科。全国にふつう。

ツメクサ



2009年4月2日、神奈川県で撮影

花の形が金魚そっくりという、まさにその名の通りの園芸植物。英名では snap-dragon という。向こうの国の dragon は日本や中国の龍と違って寸胴で、たしかにこの花のようなずんぐりした姿をしている。その英名にこだわらず的確な和名を付けた人は秀逸だと思う。花色、草姿などに、かなりバリエーションがある。花後にこぼれダネがたくさん散らばるためか、民家の近くで逃げ出した個体を見かけることが多い。以前はゴマノハグサ科とされていたが、遺伝子を調べた系統樹の研究から、今はオオバコ科に入っている。南欧・北アフリカ原産。写真のものは矮性タイプ。

キンギョソウ



2009年6月6日、愛知県で撮影



2008年6月23日、愛知県で撮影

花に特有の美しさがあるので、あの独特の匂いさえなければもっと好まれていたかもしれない植物の一つ。中国雲南省の南部からベトナムにかけての地域では、根茎を生のままサラダとして食べる。もちろん強烈な匂いは日本のものと同じ、そのままでは、匂いをこまかすためにハッカの葉を散らしてくれるが、それを口にすると、匂いと香りが打ち消し合うことなく、両方押し寄せてくることになるので、かえって苦しい思いをすることになる。その根茎は狭いところも自在に通り抜けて陣地を広げるので、写真のようにコンクリートやアスファルトの割れ目に沿って面白い姿を見せることもしばしばだ。なおあの匂いは熱に弱いいため、火を通せばあっさりと消えてくれる。ドクダミ科。本州以南にふつう。

ドクダミ

る話で引き合いに出される。どんな野生植物でも、思いがけず人間の医学の発達に重要な役割を果たすことがあるから、あらゆる生物種を保護しなくてはいけない、という理屈である。

しかしニチニチソウが必要ななら、今どきマダガスカル奥地に探検に行くまでもなく、世界各地の庭や花壇に大量に植えられているものを使えば済んでしまう。野生植物の多様性の保全を訴えるには、これはむしろ戦略ミスだと思う。自然保護はヒトの利益から語るのではなく、それ自体の価値として訴えるべきものではないか。

キョウチクトウ科。そう思っただけで見れば、庭木などに植えるキョウチクトウと、つぼみときの花弁の巻き方などで雰囲気共通しているのが分かるだろう。

最近出てきた品種もさっそく隙間に進出。2012年10月17日、東京都で撮影



昔ながらの品種。2009年7月19日、沖縄県で撮影

もともとはマダガスカル原産だが、育てやすいこと、真夏の暑い盛りにも元気に花を咲かせること、近年いろいろな色と形の園芸品種が発達したことから、日本だけでなく世界中の花壇に植えられるようになった。タネは小さく、鉢や花壇に植えられていた個体からこぼれて翌年、写真のように近所のアスファルトの隙間などに逃げ出し、野生化することも多い。日本では沖縄など南に行くほど頻繁に見るので、やはり冬が短いほうが好きなのだろう。

なお本種から抗ガン剤の成分が見つかったことから、ニチニチソウはしばしば、発展途上国における生物多様性保全の重要性を訴え

ニチニチソウ



2002年7月、愛知県で撮影

フレンチマリーゴールド

マリーゴールドと呼ばれる園芸植物としては、大別して二つのタイプが日本で普及している。小柄なフレンチマリーゴールドと、大振りなアフリカンマリーゴールドである。どちらも夏咲きだが、フレンチマリーゴールドのほうが、ずっとコンパクトな草姿で花数も多く、長く咲く。そのため花壇に、プランターに、植え込みにと愛用され、街中で見かける機会が多い。

また観賞用だけでなく、根を傷める害虫のネコブセンチュウを排除する効果もあることから、薬剤でなく生きものの力で病虫害を防ぐ生物防除にも畑作で用いられる。

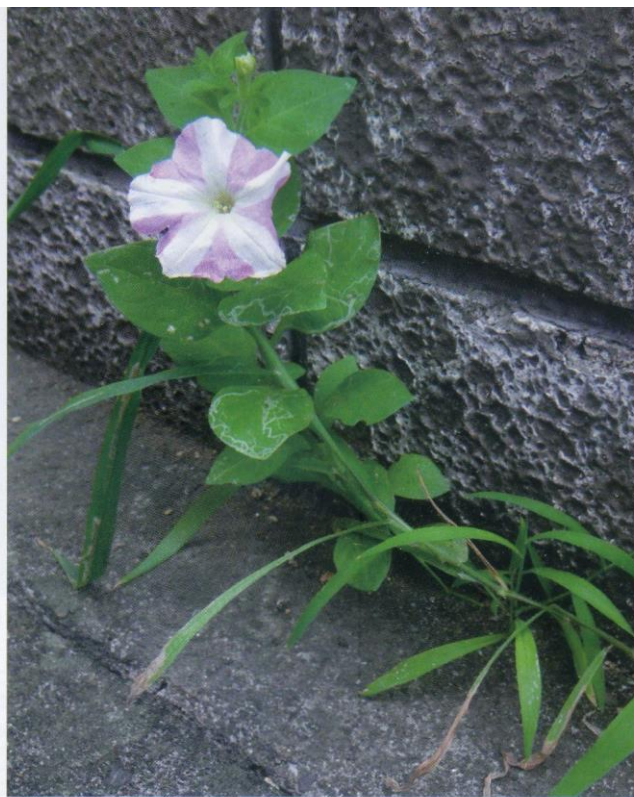
なおフレンチもアフリカンもじつは原産はともにメキシコ。これらの園芸名に付いている地名は、それぞれの品種改良の舞台となった場所である。ただしそれは初期の話。園芸市場での人気が高いため、いずれも今はアメリカはじめ世界の種苗会社が品種改良を進めている。

花の後、放っておくとたくさんの細いタネ（正確には果実）を付けるので、前年に栽培していた場所の近くでは、自然とこぼれタネで次世代が育つ。キク科。



2002年6月、愛知県で撮影

最近の交配種にはタネがうまく付かないものもあるが、古典系統は、花の後、多数の小さな丸いタネを付けるので、隙間に進出する機会が多いのだろう。ナス科。



ペチュニアというと、写真のように車軸型の花模様を想起する方も多いただろう。2012年8月22日、東京都で撮影

ペチュニア

昔から日本はペチュニアの品種改良がお家芸だ。最近では近縁他種との交配から、サフィニアなど、さらに多様な品種群が生まれ、普及している。ただし民家から逃げ出して隙間にちゃっかり暮らしているものは、だいたいが古典的な、昔からある系統が多いようだ。

花の後、多数の小さな丸



④ 2002年9月、愛知県で撮影
 ⑤ 2012年9月22日、神奈川県で撮影



花屋では売られているのを目にしないが、民家の庭先ではよく目にするといったタイプの園芸植物の代表例。宿根性があって、一度根付けば、放任栽培でも毎年花を咲かせるうえ、大量にタネを付けてそれでまた増えるので、ロコミ式に広がってきた。開花は毎日夕暮れ時から翌朝にかけて。訪花昆虫を招く夕方から夜にかけての花の香りは独特で、夏の夕涼みにふさわしい風情がある。

花色は紅が基本だが、黄、白、絞り咲きなどいろいろな色変わりも知られており、また萼がくが花弁のように色付く二重咲きもある。熱帯アメリカ原産。オシロイバナ科。

オシロイバナ



イヌタデ

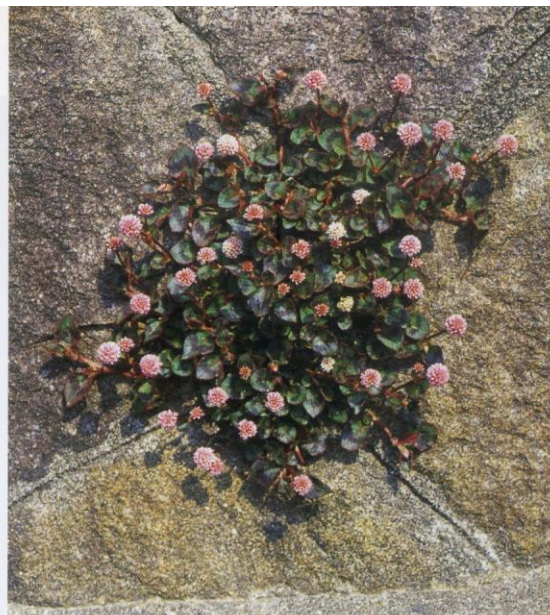
秋

いわゆる赤まんま。ちょっとした地面があれば生えてくる、最も身近なタデである。鮎（アユ）に添える蓼酢のタデは本種ではなく近縁種のヤナギタデ。ヤナギタデのような使い道がないことから犬蓼という。写真ほど一面に鮮やかに紅葉するのはわりと珍しい。全国にふつうで海外も千島、サハリン（樺太）からヒマラヤ、マレーシアまでかなり広く分布する。タデ科。2013年11月11日、東京都で撮影



2012年5月13日、神奈川県で撮影

植えられている。ヒマラヤ生まれゆえか、かなり気温が下がっても日だまりで盛んに花を付ける点も、人気の一因だろう。左の写真のように稀に樹の洞に生えることも。タデ科。



2005年3月、愛知県で撮影

ヒメツルソバ

明治期に日本に入ってきた帰化植物。
ヒマラヤ地域から中国が原産。初めてネパール・ヒマラヤの調査に加わったとき、山麓地域の田の石垣にこれが生えているのを見て、なるほどこのあたりが原産なのだとな得した経験がある。丈夫でよく枝分かれしながら一年中花を咲かせる一方で、ツルソバ（↓158ページ）と違って手に負えないほどには繁茂しない適度な丈夫さが好まれ、各地で庭や石垣に